

# 一般相対論的量子論で無限のパラドックスを解く

清水 哲男 (Tetsuo Shimizu)

「一般相対論的量子論」においては、「任意の  $n$  次元ユークリッド空間を量子化する」ことができ、基本定理として「 $n$  次元量子システムは、『長さ』状態:  $P_{\vec{x}}$  と『速さ』状態:  ${}^{\mu}D_{\vec{x}}$  との量子論的重ね合わせ状態:  $P_{\vec{x}}(\theta)$  として表現でき、2 組の量子状態:  $P_{\vec{x}}(\theta), P_{\vec{x}}(\phi)$  の間には、一般相対論的往復運動:  $P_{\vec{x}}(\theta) \xleftarrow{G_{\vec{x}}(\theta+\phi)=P_{\vec{x}}(\theta) \otimes_S P_{\vec{x}}(\phi)} P_{\vec{x}}(\phi)$  が行われている」ことが証明できる。  $n$  次元量子システムの、演算子代数システムとしての基本構造は、「

$$P_{\vec{x}} = \begin{pmatrix} \partial_{\vec{x}} \\ d_{\vec{x}} \end{pmatrix} = \sum_{i=1}^n \gamma_{x_i} P_{x_i} = \begin{pmatrix} \sum_{i=1}^n \gamma_{x_i} \partial_{x_i} \\ \sum_{i=1}^n \gamma_{x_i} d_{x_i} \end{pmatrix}, \quad {}^{\mu}D_{\vec{x}} = \begin{pmatrix} \mu d_{\vec{x}} \\ -\partial_{\vec{x}} / \mu \end{pmatrix} = \sum_{i=1}^n \gamma_{x_i} {}^{\mu}D_{x_i} = \begin{pmatrix} \mu \left( \sum_{i=1}^n \gamma_{x_i} d_{x_i} \right) \\ - \left( \sum_{i=1}^n \gamma_{x_i} \partial_{x_i} \right) / \mu \end{pmatrix},$$

$$P_{\vec{x}}(\theta) = P_{\vec{x}} \cos \theta + {}^{\mu}D_{\vec{x}} \sin \theta,$$

$$G_{\vec{x}}(\theta) = P_{\vec{x}} \otimes_S P_{\vec{x}}(\theta) = S_{\vec{x}} \cos \theta + {}^{\mu}H_{\vec{x}} \sin \theta,$$

$$S_{\vec{x}} = P_{\vec{x}} \otimes_S P_{\vec{x}} = \left( \sum_{i=1}^n \gamma_{x_i} P_{x_i} \right) \otimes_S \left( \sum_{i=1}^n \gamma_{x_i} P_{x_i} \right) = \sum_{i=1}^n P_{x_i} \otimes_S P_{x_i} = \sum_{i=1}^n S_{x_i},$$

$${}^{\mu}H_{\vec{x}} = P_{\vec{x}} \otimes_S {}^{\mu}D_{\vec{x}} = \left( \sum_{i=1}^n \gamma_{x_i} P_{x_i} \right) \otimes_S \left( \sum_{i=1}^n \gamma_{x_i} {}^{\mu}D_{x_i} \right) = \sum_{i=1}^n P_{x_i} \otimes_S {}^{\mu}D_{x_i} = \sum_{i=1}^n {}^{\mu}H_{x_i},$$

$$\begin{cases} G_{\vec{x}}(\theta) \odot_A P_{\vec{x}} = \begin{pmatrix} [\partial_{\vec{x}}, G_{\vec{x}}(\theta)] \\ [G_{\vec{x}}(\theta), d_{\vec{x}}] \end{pmatrix} = P_{\vec{x}} \cos \theta + {}^{\mu}D_{\vec{x}} \sin \theta = P_{\vec{x}}(\theta), \\ G_{\vec{x}}(\theta) \odot_A P_{\vec{x}}(\theta) = \begin{pmatrix} [\partial_{\vec{x}} \cos \theta + \mu d_{\vec{x}} \sin \theta, G_{\vec{x}}(\theta)] \\ [G_{\vec{x}}(\theta), d_{\vec{x}} \cos \theta + (-\partial_{\vec{x}} / \mu) \sin \theta] \end{pmatrix} = P_{\vec{x}}, \end{cases}$$

$\Leftrightarrow$

$$\begin{cases} \pm P_{\vec{x}} \xleftarrow{S_{\vec{x}}=P_{\vec{x}} \otimes_S P_{\vec{x}}} \pm P_{\vec{x}}, & \left\{ \begin{array}{l} \pm {}^{\mu}D_{\vec{x}} \xleftarrow{S_{\vec{x}}=P_{\vec{x}} \otimes_S P_{\vec{x}}} \mp {}^{\mu}D_{\vec{x}}, \\ \pm P_{\vec{x}} \xleftarrow{-S_{\vec{x}}={}^{\mu}D_{\vec{x}} \otimes_S {}^{\mu}D_{\vec{x}}} \mp P_{\vec{x}}, \\ \pm {}^{\mu}D_{\vec{x}} \xleftarrow{-S_{\vec{x}}={}^{\mu}D_{\vec{x}} \otimes_S {}^{\mu}D_{\vec{x}}} \pm {}^{\mu}D_{\vec{x}}, \end{array} \right. \end{cases}$$

$$\pm P_{\vec{x}} \xleftarrow{{}^{\mu}H_{\vec{x}}=P_{\vec{x}} \otimes_S {}^{\mu}D_{\vec{x}}} \pm {}^{\mu}D_{\vec{x}},$$

$$S_{\vec{x}} = \sum_{i=1}^n S_{x_i} = \sum_{i=1}^n (\partial_{x_i} d_{x_i} + d_{x_i} \partial_{x_i}) / 2,$$

$${}^{\mu}H_{\vec{x}} = \sum_{i=1}^n {}^{\mu}H_{x_i} = \sum_{i=1}^n (-\partial_{x_i}^2 / 2) / \mu + \mu d_{x_i}^2 / 2,$$

」である。1 波長以内の近傍:  $\vec{x}, \vec{x}'$  に, 2 個の量子システム:  $P_{\vec{x}}(\theta), P_{\vec{x}'}(\theta)$  が重なり合っ  
て存在したとすれば, それらは, 「長さ」と「反・長さ」とが対生成/対消滅することによ  
って生じる「長さ」が「 $\sim 0$ 」の領域, を共有することによってクーパー対を作り,  
その領域を一般相対論的慣性運動によって通過することができ, その結果として, ロー  
レンツ収縮が観測される。各量子システムは, 「長さ」状態には「確率:  $\cos^2 \theta$ 」, 「速さ」  
状態には「確率:  $\sin^2 \theta$ 」, 合わせて, 「 $\cos^2 \theta + \sin^2 \theta = 1:1$  個の量子システム」として存  
在し, 「波長:  $\|d_{\vec{x}}\| \cos \theta$ 」の「長さ」が, 「長さ」状態と「反・長さ」状態とが対生成/対  
消滅することによって生成される「長さ」が「 $\sim 0$ 」で『速さ』のみが存在する「領  
域:  $\|d_{\vec{x}}\| \sin \theta$ 」によって次々と接続されて,  $n$ 次元ユークリッド空間が構成される。

各基本(1次元)量子システムの「長さ」状態:  $P_{x_i}$  は, 「微分演算子:  $\partial_{x_i}$ 」と, それに双  
対する「積分演算子:  $d_{x_i}$ 」との一対であり, 「量子論の公理:  $[\partial_{x_i}, d_{x_i}] = 1$ 」を充たしてい  
るから,  $\|\partial_{x_i}\| \cdot \|d_{x_i}\| \geq \|\partial_{x_i} d_{x_i} - d_{x_i} \partial_{x_i}\| / 2 = 1/2$ , と「不確定性原理」が証明できる。各基本  
量子システムの「長さ」状態:  $P_{x_i}$  の積分演算子:  $d_{x_i}$  のノルム:  $\|d_{x_i}\|$  は, 量子の波長に対応  
し, 「0(無限小)」でも「 $\infty$ (無限大)」でもなく, 量子論の公理:  $[\partial_{x_i} / \zeta, \zeta d_{x_i}] = [\partial_{x_i}, d_{x_i}] = 1$   
( $\zeta$ :スケール変換因子)を充たすから, 量子の波長を  $1/2$  にしようとするれば, その運動量  
は2倍になる。よって「0(無限小)」の波長をもつ量子の運動量は「 $\infty$ (無限大)」となり,  
自然には存在不可能である。すなわち「任意の  $n$ 次元ユークリッド空間を構成する  $n$ 次  
元量子システムは, 必ず, ユークリッド計量:  $d_{\vec{x}}^2 = \sum_{i=1}^n d_{x_i}^2$  の, 平方根:  $d_{\vec{x}} = \sum_{i=1}^n \gamma_{x_i} d_{x_i}$  に相  
当する有限, かつ, 不可分な『長さ』をもっている」ことが, ここに証明できた。

「一般相対論的量子論」で量子化したユークリッド空間は, 有限かつ不可分な「長さ」  
をもつ量子システムのみから構成でき, 各量子システムは, 自分たち自身が構成したユ  
ークリッド空間上を, 自由に, かつ, 自律的に, 1つの部分としても, また, 多くの部  
分が結合しあつた1つの全体としても, 一般相対論的慣性運動を行うことができる。よ  
って, ユークリッド『原論』の冒頭において「点とは部分をもたないものである」と定  
義されるような「長さ = 0(無限小)」の量子も, むろん, 「どこまでも交わることのない  
2本の直線(平行線)」に相当する「長さ =  $\infty$ (無限大)」の量子も, 自然界においては存在  
することが全く不可能であり, 存在する必然性も全くない。かくして, 近・現代自然学  
を悩ませてきた「無限のパラドックス」およびそれに起因する「運動のパラドックス(ゼ  
ノンのパラドックス)」は自然消滅する。量子化されたユークリッド空間には, いかなる  
「特異点」も存在しえないから, いわゆる「発散の困難」もまた自然消滅する外はない。